

掌蹠膿疱症はビタミンHといわれるビオチンの欠乏によって起こるのではない。

まず掌蹠の意味について説明しましょう。掌は、手掌の掌であり、つまり手のひらを意味します。蹠は足蹠の蹠であり、つまり足の裏であります。従って、掌蹠膿疱症とは、手のひらと足の裏に限局して膿をもった疱疹状の症状が出る皮膚の病気を意味します。ご存知のように、皮膚の構造は一番下が基底層であります。表皮の底の基にあるので、一番下を基底層というのです。下から2番目に有棘層があります。細胞の膜に棘（とげ）を持っている細胞でできているので有棘層というのです。さらに顆粒層となります。細胞の中に顆粒がたくさん作られてくるので顆粒層というのです。手掌の皮膚以外は最上層に角質層があります。なぜ角質層と名前がつけられたのでしょうか？実は角質層は細胞の集まりではなくて、細胞が死んでしまった後に堅くて薄い板状に積み重なっている層です。

それでは角質とは何でしょうか？角質は高濃度に硫黄を含むタンパク質であり、ケラチンともいわれます。このケラチンはタンパク質に特徴的な構造である α 螺旋構造や、 β 構造が多いため、水や塩類溶液に溶けない上に、薬品や酵素に対しても抵抗性が強いタンパク質そのものであります。このケラチンが細胞体を満たすときには、皮膚の細胞は死んでしまうのです。この死んだ細胞が角化層として体中を覆っているのです。この死んだ角質が風呂に入ったときに落とされる体の垢の正体なのです。

普通の皮膚は以上に述べた4つの層でできているのですが、手のひらと足の裏だけに角質層の下に淡明層が存在します。なぜ手のひらと足の裏だけに淡明層があるのでしょうか？元来、4つ足であった人間の祖先は、手のひらと足の裏で胴体を支えていたので、手足に大きな圧力がかかる上に、かつ4足歩行で移動するときに、様々な手の平や足の裏を傷つける異物との接触が必然的に生じるからです。既に述べたように、角質層は死んだ細胞であり、このような圧力や有害な異物に耐えられるのでありますが、4足歩行に耐えられるように掌蹠の皮膚は、さらにもう1層の死んだ淡明層を追加したのです。いわば二重の死んだ層が積み重なっているのが掌蹠の皮膚の特徴であるのです。死んでしまった角質層と淡明層には傷がつかないからです。その結果、見かけも掌蹠の皮膚だけが他の全身の皮膚の色やツヤなどに違いが生まれるのです。

それでは掌蹠膿疱症の膿疱はどうして生じるのでしょうか？本来、膿は白血球の中の好中球が化膿菌と戦った後に生じる好中球の死骸や、細菌の死骸や、炎症による組織や組織細胞の崩壊産物の集まりであります。ところが、この掌蹠膿疱の膿は無菌性の膿であることが分かっています。それでは膿疱とはどのような意味を持つのでしょうか？膿疱は正確には膿性疱疹というべきものです。疱疹とは水泡、つまり水ぶくれしたものが化膿して混濁し、不透明な液で満たされたものであります。それでは掌蹠の膿疱はどのようにして生じるのでしょうか？いつも言っていますように、病気というのは異物が入ってそれを免疫が認識し、症状を生じるのです。この場合は免疫の武器は好中球であります。異物が細菌でなければ一体何なののでしょうか？

昔から掌蹠膿疱症は、金属アレルギーだといわれてきましたが、確かに体内に侵入した異物である様々な金属が原因となることもあるでしょうが、実はアレルギーは好中球には直接かかわりがないのです。アレルギーに関わる細胞は肥満細胞であり、好酸球であり、好塩基球の3つであります。従って好中球がかかわっている掌蹠膿疱症は、アレルギーとは直接関係ないのであります。さらに掌蹠膿疱症においては、アレルギー抗体であるIgE抗体も高くなることはないのです。掌蹠膿疱症はアレルギー疾患とはいえないのです。つまりアトピーの特別な形ではないのです。

それでは好中球、別名、多核白血球、好中性顆粒球はどんな仕事をするのでしょうか？元来、生体に侵入してくる細菌や真菌や原虫などを貪食して体外に除去する仕事をしているのはご存知でしょう。しかし掌蹠膿疱症においては膿疱に菌が見られないので、このような病原体と戦って生ずる病気ではありません。それでは好中球は何と戦っているのでしょうか？

21世紀の現代において、病気の原因となる異物は、いつも言っていますように、化学物質とヘルペスしかありません。ヘルペスの住処はあくまでも神経細胞ですから、まずありえません。それではやはり化学物質と考えられます。しかもこの化学物質が死んだ淡明細胞の成分と特別に親和性を持っていると考えられます。手の平や足の裏の細胞は死んで形がなくなっているのです。細胞のない透明な層になっているのです。この死んだ透明な層の成分と結びついた化学物質を、下の層にある血管からしみでた大量の好中球が有害な異物と認識し、それを食べまくりまします。ところが化学物質は殺すことが出来ないのです。好中球の寿命は4～5日ですから、寿命が尽きて自らの死体が膿となるのです。同時に、自分が死ぬときに自ら持っている様々な酸性加水分解酵素や、タンパク質を分解するプロテアーゼという酵素や、ペルオキシダーゼという酸化酵素を放出し、淡明層組織のみならず、その周辺の組織障害を引き起こし、炎症症状として膿疱症が生じるのです。

ところが近頃、全国の皮膚科の診療所で、掌蹠膿疱症はビタミンB群のひとつであるビオチン不足のために生じると宣伝して、じつはこっそりとステロイドホルモンを塗らせるというとんでもない医療がまかり通っています。もちろんステロイドを使う限り、いかなる病気も治ることはありません。ビオチンは別名、ビタミンHやビタミンB7といわれることがあります。豊かな食生活を満喫している日本人にビタミン不足が生じることは絶対にはないのです。ちなみにこのビオチンが発見された当初は、若ハゲにも効くといって全世界で売られまくったことがあります。もちろんビオチンと若ハゲは全く関係ないので誰一人治った人はいませんでした。

もしビオチンが不足して掌蹠膿疱症が治るものならば、何も診療所に行く必要もないので、薬局でビオチンを買わせるだけで治ってしまいます。当院には長期にビオチンとステロイド軟膏を何年も使ったが治らない掌蹠膿疱症の患者がたくさん来られています。彼らもやはりステロイドをやめざるをえないので、そのえげつないリバウンド症状で悩んでいる患者を見ると残念でたまりません。

このようなビオチン商法は陽動作戦といえます。ステロイドで治らないことが分かっているのですが、病気とは全くかかわりのないビオチンという一般の人には聞き慣れないビタミンを特別なビタミンとして飲ませ、一方では、見かけを良くする必要があるので、同時にステロイドを塗らせるのです。ステロイドの塗り薬に何が入っているかを聞かれたときには、こっそり「少量のステロイドを使っているだけですから心配しなくてもよろしい」と言って、大量のステロイドを塗らせる医者があちこちにいるのは残念なことです。現代のあらゆる病気の原因は、ステロイドが作っているといても過言ではないのです。免疫を抑える限り絶対に病気は治らないのです。くたばれ！ステロイド！

それでは掌蹠膿疱症の正しい治療法はどうすればよいのでしょうか？常々言っていますように、症状は免疫が正しい反応を起こしているだけですから、淡明層にたまった特別な異物を免疫を上げる漢方を用いて出し尽くせば、自分の免疫で治すことができます。ただ膿疱の後始末をする必要がありますが。免疫を上げる唯一の薬は漢方だけであることを知っておいてください。

2014/09/04